ARGONAUTES
別府大学図書館報

アルゴノートNo.58

CONTENTS

『源氏物語』と図書館と …… 浅野　則子
古本屋の思い出…… 河野　　豊
初学者の佳句への遠き道…… 樋園　和仁
「常識を打破する読書経験」…… 佐々木龍平
読書バリアフリーを知っていますか ーユーザー視点での読書文化の成熟に向けてー … 川野美沙季
別府大学附属図書館・司書課程共催　図書館見学ツアー2023 … 佐藤　晋之
令和５年度は「図書館友の会 FOBUL」が大活躍しました
第１４回選書ツアーの実施

『源氏物語』と図書館と

別府大学附属図書館長　浅　野　則　子

新たな年のテレビドラマの主人公に紫式部が選ばれたことで、「源氏物語」が脚光を浴びている。書かれた当時も「源氏物語」は光源氏と彼を取り巻く女性たちとの恋のあり方をめぐって、女性のみならず、男性の心をも動かしていたようである。紫式部が仕えていた中宮彰子（藤原道長の娘）が天皇の皇子を無事出産し、宮中に戻る時、「源氏物語」を持っていったと紫式部は日記に綴っている。それほど貴重な文学作品として考えられていたのであろう。日記によれば宮中へ持っていくべき物語は初冬の寒い頃、女房達によって整えられたという。美しい紙を選び、字が美しい者にそれに書き写してもらうよう依頼し、書き写されたものを他の女房たちが綴じて美しい冊子にしたという。いわば手作りの冊子である。物語が形になることはそれほど困難なことであった。物語を手にして読みたいという願いは現在の私たちには考えられないほど強いものであったに違いない。

今、図書館には当たり前のように多くの書物が並んでいる。「源氏物語」もその中の一つとして存在している。誰かが書き写し、読み継がれ、やがて活字となった書物。私たちの前にある文字の世界は遠く遙かな時代から続いてきたものであり、それを今の私たちが受け継いでいるのだ。図書館は時間、空間を超え、本を通して私たちに語りかけていると言えよう。

古本屋の思い出

国際言語・文化学科　河　野　　豊

「古書店」と言うと小奇麗な店内にいくつもの全集の全巻揃いがずらりと並んでおり、「古本屋」というとさほど広くなくて、気難しそうな店主が奥に座っているという印象がある。高校生の頃から古本屋通いをしていた身としての単なる個人的な印象に過ぎないのだが。

私が高校生の頃、京都の河原町通には何軒もの古本屋があり、よく通っていた。まだあるのだろうかとさきほどGoogle Mapで検索すると、主要な古本屋はまだあった。その例で言えば、赤尾照文堂（2020年に寺町二条に移転）は古書店で、キクオ書店は古本屋である。なつかしい店名を久しぶりに見て、その頃の記憶がよみがえってきた。

インターネットが普及する前は（今は「ネット」と言うのが普通なくらい普及した）『全国古本屋地図』という本が発行されていて、それをたよりに京阪神のめぼしい古本屋はあらかた行ったと思う。

その後、東京に住むようになって、神田・神保町（最初は何と読むのかわからなかった）に初めて足を踏み入れた時の感激は今でも覚えている。その後何度となく足を運んだ。土曜の昼前に着くように行き、「いもや」の天丼を食べた後、あちこちの古本屋を回り、途中喫茶店「神田白十字」で休憩し、夕方までいる、というのが定番コースであった。夕方には歩き疲れて、足腰が痛くなった。帰りは何冊もの古本の入ったずっしり重い袋を持つのでなおさらである。若かったらからこそできたのだろう。

本学に勤務するようになった際に、別府、大分の古本屋にはもちろん行ったが、あまり数もないので残念であった。

また、学会出張で全国各地を訪れた際も、古本屋をあらかじめ探しておき、行ったものである。

イギリスに旅行した際も、旧ハワイ大学サマーセッションの引率をした際も古本屋に行った。まったく自分でもあきれてしまう。

何十年も古本屋通いをしてきたが、今はほとんどしていない。理由はいくつかあるが（例えば歳を取ったこと）、最大の理由はネットで買えてしまうからである。

アマゾンをはじめ、古書専門サイトもいくつかある。例えば「日本の古本屋」、「スーパー源氏」など。海外ではAbeBooks（現在はAmazon傘下）など。国内国外を問わず、いくつもあるオークションサイトやフリマサイトでも古本は買える。

読むだけであれば、『アルゴノート第56号』で言及したHathiTrustや国立国会図書館デジタルコレクションも使える。

いずれにせよ最近では新刊書、古本問わず、実店舗に行く機会は著しく減った。さらにコロナ禍による外出規制がそれに拍車をかけた。

また、電子書籍の普及のため実店舗の数は減少し続けている。電子書籍は「モノ」としての書物の意味を改めて問い直している。大昔、浅田彰氏がテレビで本をぱらぱらさせて「本ってこんなにランダムアクセスできるんですよ」と言っていたことが思い出される。電子書籍はそうはいかない。

今後も古本屋に行くことはあるだろうが、それはたまたま通りかかったりした場合だけかもしれない。

退職後は自分の蔵書を元に古本屋を開業し、気難しい店主になろうかな。

初学者の佳句への遠き道

食物栄養学科　樋　園　和　仁

俳句を実作するために詠む入門書は、最近いろいろと出版されていますが、いずれも下記の２冊の内容をなぞってはいますが、それを越えるものは未だ無いと思います。

私が最初に俳句を詠むにあたって、まず手に取った本は、藤田湘子の『実作俳句入門』（角川ソフィア文庫）です。この本は 1985 年に刊行されて、その後新版となり、最近になり文庫化されています。藤田湘子は、この本の３年後に『20 週俳句入門』（角川学芸出版）を刊行していて、どちらかというと初めて俳句を詠む人にとっては、こちらの方が合っていますし、今でも定番の俳句入門書です。

『実作俳句入門』は、どちらかというと俳句を詠み始めて数年の人に合っているのですが、たまたまこちらを先に手に取ってしまいましたが、読み物として読んでみると初学者としても面白い内容です。

作者の藤田湘子は、水原秋桜子や石田波郷に師事し、多くの弟子を育てています。その中で先ほどの入門書を作成したのも必然かと思われます。

うすらひは深山へかへる花の如　藤田湘子

本書の構成は､「実作の前に」「実作のポイント」「作句のテクニック」に分けられています。「実作のポイント」は俳句の初学者が陥りがちな失敗例を多く載せています。例えばその章の始めには

信濃路の旅を偲びて春炬燵

という句を出しています。もちろん、これは失敗例として出しています。通常の入門書は名句や添削用のもう少し工夫するとよい句などが挙げられますが、これは、「信濃路」と「偲びて」の２カ所の問題点を指摘しています。

現代に至る俳句の基礎を築いた正岡子規は「写生」と称した客観的な科学精神を持つことを説きました。その後、子規の弟子である高浜虚子による客観写生から花鳥諷詠へ至る頃より徐々に俳人達の作風が分かれていくことになります。現在でも俳句雑誌には「写生」を特集として、論考されていることよりその内容の深いことと作句にとって重要なことの証左です。

子規が俳句の革新を行うときに俗悪句、月並俳句とされた句があり、この本の中にも

夫のるす月さへ入れず戸ざしけり

といった例を挙げています。今日でも似たような詠い方が後を絶たないとして､湘子は風流がり、気どり、道徳観、倫理観、教訓、穿ち、小主観、理屈、浪花節などを強く批判しています。初学者の陥りやすいポイントが辛辣に述べられていることは、作句する際に必ず頭に入れておかなくてはいけないことです。

巻末には「佳句を味わう」として、佳句とその作者について簡潔に述べられています。

まつすぐの道に出でけり秋の暮　高野素十

高野素十は、別府大学名誉教授で俳人の倉田紘文が師事し、当時の新潟医科大学長も勤められた医師の大先輩でもあります。徹底した一物描写で有名ですが、客観写生の上に「心の涵養」を詠んだことは、倉田紘文の研究でも明らかです。

作句は技巧のシステムであり、スキームに言語を当てはめることですが、十七音という短詩の中で、一つ一つの言葉の意味は大きくなってしまいがちです。それは前述した月並俳句になってしまったために子規の改革が行われました｡しかし、その後太平洋戦争中に「戦意高揚の標語」的に使われてしまい、戦後、桑原武夫による「第二芸術論争」にもつながっています。

作句は個人的なものですが、独りよがりになってしまうと、何かに利用されかねないものでもあるということを再認識したうえで、佳い句を作る努力を尽くすことと迷ったときには、この本に戻りたいと思います。

「常識を打破する読書経験」

教職課程　佐々木　龍　平

本をテーマにしたお話、ということで、私がよく本を読むようになったきっかけと、私を研究の道に誘ってくれた本の話をしようと思う。

私は中学校１年生のときに学校に行けなくなった。理由は今でもわからない。

家から出られないとき、本は救いであった。当時は児童書やSF小説をよく読んでいたように記憶している。現実の生活が苦しいとき、空想の世界はよくよく私を癒してくれた。そのおかげか、今でも本を読むことは私にとって苦ではない。

高校はなんとか進学できた。ただ、学校に行くだけで疲れ切ってしまうので、土日は外に出ず家でゆっくり過ごした。そういうときもだいたい本を読んでいた。『星を継ぐもの』（ジェイムズ・P・ボーガン 1980）というSF小説を読んだ際、学者が残された僅かな手がかりをもとに壮大な謎を解き明かす様をかっこいいな、と思い漠然と研究職にあこがれを持つようになった。思えば、これが研究職をめざすようになった最初のきっかけだったのかもしれない。

大学に進学する際、なぜ自分は学校にいけなかったのかを問い直したいと思い、教育学部を選んだ。学校はそもそも必要なのか、という反骨精神に似た思いもあったように思う。

無事に大学進学を果たして嬉しかった反面、心配事もあった。教育学部に進学するような人は学校が大好きな人ばかりで、私は浮いてしまうのではないか、学生生活を一人で過ごすことになるのではないか、と本気で心配していた。しかし、入学者のスピーチでは、多くの人が現在の学校やそれを取り巻く制度に疑問を抱いていることを知り大いに安心した。学生生活は楽しく過ごせた。

大学４年生になり、卒論執筆の時期となった。様々な論文、書籍を読んでいる際、私の進路を決定づける一冊に出会った。貴戸理恵の『不登校は終わらない－「選択」の物語から〈当事者〉の語りへ』（2004）という本である。この本の著者も不登校経験者である。そして、それまで論文や書籍で取り上げられている不登校像が、結局は第三者が代弁しているものに過ぎない、ということを主張していた。誰かにとって都合の良い不登校像ではなく、ただ当時者、不登校経験者にとって不登校はどういう意味を持つことだったのかを本書は問い直している。

当時、教育学領域における不登校関連の論文を読むと、たしかに「どのように登校復帰させるか」という「解決」「治療」を目指すものばかりであったように思う。そうではなく、不登校をしたことは本人にとってどのような意味があったのか、不登校になった後どのような進路を選んだのか、そのときどのような苦労があったのか、という当事者にとってのリアリティを追求した本書は、私にとってとにかく新鮮であった。そして、一当事者である私にとって、研究は当事者をそのような代弁者から解放してくれる一つの手段であることを教えてくれた。

ただ、私は学校の先生にも助けてもらったことがある。また、教育学部で学ぶ中で、登校復帰させたい、という想いもあくまで善意にもとづくものであったということを理解した。そこで、貴戸（2004）の主張を大切にしつつも、様々な立場・考えを持つ人々が、「不登校」をどのように考えているのかを知りたい、と思うようになった。現在は、そのようなことについて研究している。

貴戸の書籍を読み、本とは、自己を縛る常識を解放してくれるものだと学んだ。皆さんも、ぜひ常識を打ち破る読書経験をしてほしいと思う。

読書バリアフリーを知っていますか。
—ユーザー視点での読書文化の成熟に向けて—

人間関係学科　川　野　美沙季

「読書バリアフリー」という言葉を知っていますか。

2019年6月に視障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律、通称、「読書バリアフリー法」が整備されました。この法律は、身体的な障害や加齢による読書の制限を受けることなく、すべての国民が等しく文字や活字文化の恩恵を受けることが目的とされています。以下は読書バリアフリーの例です。皆さんもバリアフリー図書や機器を書店や図書館で目にしたり、手にしたりした経験があるかもしれません。

大活字本	大きな文字で書かれた本
点字図書	点字に翻訳された本
LLブック	ピクトグラムや優しい言葉を使って分かりやすく書かれた本
触る絵本	触って絵の形が分かる絵本
UDデジタル教科書体フォント	文字のユニバーサルデザインを目指して開発されたフォント
電子書籍	内容をデジタルデバイスや音声で聴くことができる本
朗読サービス	持参した本を朗読者が読み上げるサービス
サピエ図書館	インターネット上の電子図書館

私は発達障害を専門として、臨床心理学の領域で学んできましたが、読書の『バリア』について考えるきっかけとなったのは、第169回芥川賞受賞作の『ハンチバック』（市川沙央著）を読んだことによります。作者は先天性ミオパチーによる筋疾患患者であり、車いす・人工呼吸器をつけた生活を送っています。作者は、紙の本を読む際の首や背骨への負荷、指先の力でページをめくることの困難を克明に記し、紙の読書文化には「マチズモ」(特権性)があること、その特権性に気づかないマジョリティの無知さを痛烈に批判しました。

わが国ではICF（国際生活機能分類）による障害の「社会モデル」を前提とした社会体制の構築が目指されています。これは、障害は個人の身体性に起因する問題ではなく、「社会の側の問題である」という視点に基づいて障害を理解する考え方です。読書バリアフリーを「社会モデル」でとらえると、読書は誰もが享受できる当たり前の権利であり、社会が何らかの理由で読書の機会を提供しないことは「障害」を助長させてしまう一因となると考えられるでしょう。もちろん、バリアフリー機器導入に至るまでの現実的な課題はありますが、『ハンチバック』はすべての人が自分に合った読書スタイルを選べる社会設計を促す、大きなきっかけの1冊となったように思います。

読書バリアフリー推進には、実際に書籍を利用する「ユーザー」との協働も欠かせません。左表に示したＵＤデジタル教科書体フォントは、開発段階からロービジョンやディスクレシアの当事者・支援者が参画して作成されました。フォント作成までの過程が綴られた『奇跡のフォント－教科書が読めない子どもを知って　ＵＤデジタル教科書体開発物語－』（高田裕美著）では、開発者がユーザーや支援者へのフィードバックと修正を重ねながら、文字の字間や縦横線の比率など細部に至るまで「伝わる」ことに徹底的にこだわった過程を知ることができます。著者はＵＤフォント開発を通して「多様性」という言葉に込められたマイノリティへの無関心を問題提起し、選択肢を用意するだけでは本来の意味での多様性の実現には至らない、と指摘します。多くの技術者の手によって、読書に関するテクノロジーは発展してきています。今後は、私たち自身がこの問題について積極的に関与していくことが求められているのです。

私は大学時代に図書館ボランティアとして、図書館環境の整備全般にかかわっていました。当時の図書館職員の方や先生方の寛大な姿勢に支えられ、ビブリオバトル（書評合戦）の企画や、図書の企画展示、読書環境の整備などの活動を経験しました。これらの活動から自分の置かれている環境に疑問を持ち、実現可能な範囲からアクションを起こすことを学び、今の職業生活にもつながる力を得ることができました。別府大学の学生さんにもぜひ読書環境に関心を持ち、積極的に読書環境について考えてみてほしいと思っています。「自分事」として読書環境を見つめた時、どんな疑問がわきますか。ぜひ一緒に考えていけると嬉しいです。

別府大学附属図書館・司書課程共催 図書館見学ツアー 2023

司書課程　佐　藤　晋　之

2023 年 10 月 28 日（土）、別府大学附属図書館と司書課程の共催で図書館見学ツアー（以下、見学ツアー）を開催した。見学先の選定は、コロナ禍以降初めてとなる県外施設を検討した。その際、司書課程履修の学生らから意見を聞き、候補を絞ることにした。その結果、今年度の見学先は熊本県荒尾市にある荒尾市立図書館となった。

荒尾市立図書館は、令和４年に紀伊國屋書店に業務委託をし、商業施設内にリニューアルした。商業施設内で書店と隣り合う場所での運営という全国でも珍しい図書館である。参加者［写真１］は、学生 28 名と引率教員２名の計 30 名だった。秋晴れの中、公共図書館の新しい在り方について学びを得ることのできた一日だった。本稿では、2023 年度の見学ツアーについて報告する。

写真 1. 集合写真

見学ツアーの行程及び内容は以下の通りである。大学正門を午前８時 15 分に出発し、途中 15 分休憩を挟み、午前 10 時 45 分に荒尾市立図書館に到着した。11 時より見学ツアーが始まった。まずは、商業施設への移転に関する内容を中心とした概要説明［写真２］を 30 分間受けた。その後、干潟をイメージして設計された館内［写真３］を１時間かけて見学した。

写真 2. 図書館の概要説明を受ける学生たち

写真 3. 館内見学の様子

最後は、30 分程度、書店が運営する図書館の特性を活かした様々なイベントの取り組み事例の紹介と質疑応答［写真４］があった。２時間の図書館見学を終えた後は、昼食を兼ねて図書館が併設された商業施設内の自由見学とした。午後３時に図書館を出発し、午後６時帰着した。

写真 4. 積極的に質問をする学生

参加者アンケート（28 名のうち 17 名が回答）では、全ての参加者が見学時期や場所、内容について「大変満足」と回答していた。図書館への興味関心を刺激されたことの分かる声が多数あり、次年度も継続していきたいと考えている。

令和５年度は「図書館友の会 FOBUL」が大活躍しました

図書館友の会 FOBUL は、Friends Of Beppu University Library の略称です。FOBUL の歴史は古く、これまで数多くの図書館好き・本好きの学生が所属しており、附属図書館を盛り上げてくれる存在です。

FOBUL は、令和５年度より文化会公認サークルとなり、部員数が 26 名になりました。活動内容は、附属図書館の排架ボランティアや季節・学内行事に展示、さつき祭や石垣祭での企画など多岐に渡りました。学生目線での展示や学祭企画は、どれも新鮮で見る人を楽しませてくれ、新しい知との出会いを活性化してくれました。

FOBUL 年間活動報告

４月	新入部員勧誘
５月	さつき祭
６・７月	第１回学生企画FOBUL図書館展示 『映像化作品特集』
８月	夏期休業期間
９・10月	第２回学生企画FOBUL図書館展示 『夏の残暑を乗り越えろ！ホラー展示』
10月	石垣祭
11月	国際言語・文化学科企画展示（設営） 『先生方が学生時代に読んでよかった本』
12月	国際言語・文化学科企画展示（設営） 『先生方が学生時代に読んでおきたかった本』

第 14 回選書ツアーの実施

令和５年度の選書ツアーは、昨年度と同様に店舗訪問とオンライン形式にて実施しました。

期間は、店舗訪問が７月 12 日（水）から７月 26 日（水）、オンライン形式が７月 18 日（火）から８月 31 日（木）でした。今回は、紀伊國屋書店アミュプラザおおいた店に訪問しました。

参加数は、昨年度より個人単位に加えてゼミ単位での参加も受け付けることになり、店舗訪問９名、オンライン６名（うち２組がゼミからの参加）の計 15 名でした。

選書ツアーで選ばれた書籍は、店舗訪問 44 冊、オンライン 61 冊の計 105 冊でした。選書本は、学生本人が作成した POP と併せて１回閲覧室にて展示を実施しました。

原　稿　募　集

学生に伝えたい図書館や本に関するお話を募集しています。
心に残る一冊や図書館での思い出など図書館や本に関する話題を是非お聞かせください。
お問合せは、附属図書館までご連絡ください。

［発行］　別府大学附属図書館　　〒 874-8501 別府市北石垣 82　TEL 0977-66-9633　FAX 0977-66-9632
別府大学附属図書館ホームページ https://ufinity.beppu-u.ac.jp　　携帯版 OPAC（蔵書検索）https://lib-opac.mc.beppu-u.ac.jp/webopac/mobmopsre.do